

畿内における譜代大名城下町の基礎的考察 (1)

—山城国淀を事例として—

島根大学法文学部社会文化学科准教授 船 杉 力 修

1. はじめに

本稿は、畿内における譜代大名城下町について、17、18世紀の山城国淀（現在京都市伏見区）を事例として、歴史地理学の立場から考察を行うものである。分析で主に使用する絵図は、淀藩主が永井家であった時代のもものとされる2枚の絵図、(a) 愛知県の西尾市岩瀬文庫所蔵の「淀惣絵図」（寅-65）¹⁾と、(b) 京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵「淀城大絵図」（7.01.07.11//23）²⁾である。

譜代大名の城下町のうち、淀を研究対象としたのは、まず、筆者の所属する島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室において、今年度の法文学部専門教育科目「地理学実習Ⅰ」、「地理学実習Ⅱ」で、京都府を対象にしたフィールドワークを実施したことと関係している。実習には、同研究室の2、3年生の学生が参加した。そのうち学生1名が歴史地理学の視点から、城下町淀を調査対象としてフィールドワークを行った。本稿の対象とする城下町淀の2枚の絵図は、学生への指導、助言の過程で確認したものである。このうち、(a)「淀惣絵図」は従来の城下町淀の研究で取り上げられていない絵図であること、そして武家屋敷の人名など記載内容が(b)と大きく異なっていたことから、城下町淀の復原にあたって、いずれも重要な絵図であることが判明した。そこで研究対象として取り上げることにした。

次に、学生への指導、助言の過程で、先行研究を調査した結果、城下町淀に関する研究が少ないことも判明した。京都市内では、世界遺産に登録されている都市京都そのものに関心が多く集まる一方で、城下町淀は京都から縁辺にあたること、そして平安京形成以降の長い歴史をもつ京都に比較すれば、その歴史は江戸時代以降と短いことなどによって、従来の研究では注目されてこなかったと考えられる。

そうしたなかで、従来の研究として、まず挙げられるのは、境幸政・荻原信一の『城と陣屋3 山城淀城』所収の「淀城と淀藩」である³⁾。ここでは、松平定綱の築城、淀城の規模と構造、永井尚政の城地改修、淀藩主の系譜、淀城下町の概要、幕末付近の淀城について、それぞれ概略的に説明した上で、「淀城付近の史跡」として5ヶ所を取り上げている。前者では、永井尚政の城地改修が、後者では、江戸時代の豪商淀屋辰五郎の別荘伝説地が詳細に説明されており、いずれも本稿で取り上げる内容を詳細に記載していることが注目される。

次に、阿部宏は、享保8（1723）年から廃藩まで淀藩主であった稲葉家の家臣渡辺氏所蔵の寛延3（1750）年「山州御城府内図」をもとに、淀城の城郭、堀、城下町、水車小屋、舟渡など、城下町淀について基本的な考察を行っている⁴⁾。従来の研究では、この稲葉時代の「山州御城府内図」が主に使用されてきた。

最近では、建築史の小林大祐が、城下町絵図をもとに、寛永14（1637）年前後の城下町の復原図を作成し、木津川の流路変更による城下町拡張工事前後の状況を解説しているほか、拡張工事以後の景観を現在の地図で比定して、城下町の街区や道を現在でも見出すことができる⁵⁾としている。淀では、近代以降の市街地化により、本丸以外には淀城跡の状況が確認できないなかで、現在との比定図の成果は、城下町の痕跡を探る上で注目される。また、小林は『淀の歴史と文化』において、城下町絵図の写真や復原図を多数掲載して、城下町淀の成立と変容について、目で見て理解できるように配慮している。同著は、江戸時代の城下町淀の状況を押さえる上で基本的な文献であるといえる。

しかしながら、従来の研究では、城下町全体の景観復原は行われているものの、絵図の記載内容、特に居住者が記されている武家屋敷の人名や、寺社などの位置など、城下町絵図の分析にあたっての基礎的な研究手法である、絵図の解説及び絵図と文献史料との照合といった分析がほとんど行われていない。城下町淀の特徴を捉えるためには、こうした基礎的な調査手法が重要であることは言うまでもない。

城下町淀の発展を考察するにあたって、特に重要な時期は、小林が復原図を作成したように、木津川の流路変更による城下町拡張工事が行われた寛永

14 (1637) 年前後であるといえる。この城下町拡張工事を行ったのが、当時の藩主永井尚政であった。したがって、永井時代とされる2枚の絵図の解説が、城下町淀の研究にあたって重要な課題であるといえる。また、永井時代の淀には、城下町絵図のうち、武家屋敷の分析で使用する分限帳が残されていないものの、城下町淀の町方で年寄役をつとめた藤林家所蔵の『山城淀下津町記録』⁶⁾があり、江戸時代の淀を分析する上で最も重要な史料の一つ⁷⁾とされている。しかしながら、城下町絵図との照合などは行われていないので、こうした基礎的な作業が必要であるといえる。

さらに、本誌『松雲』の編集方針（大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果の掲載）に沿って、本稿では城下町絵図の書誌学的な分析もあわせて行うこととする。具体的には、武家屋敷や町人地、寺院、神社など城下町絵図の基本的な記載内容の分析だけでなく、絵図の伝来の経緯なども分析することとする。というのも、本稿の対象とする淀の城下町絵図のうち、永井時代の絵図とされる(a)(b)には、作成者や作成年代といった絵図の基礎的情報が記されていない。したがって、絵図の書誌学的な側面、すなわち、印記や墨記の記載内容の分析、そして、同系統の絵図との対応関係などの分析が必要であると判断した。また、従来、城下町絵図の研究では、城下町の地元に残る絵図を中心に分析されていたが、最近の研究では、金沢、姫路、桑名⁸⁾などの研究でみられるように、地元に残る城下町絵図だけでなく、全国に残っている対象地域の城下町絵図を悉皆的に取り上げ、それらの関係を検討した上で、分析する必要がある。特に、城下町絵図があまり残っていない淀のような城下町では、こうした手法が欠かせないといえる。本稿では、各藩が国絵図とともに、収集、所蔵した、全国各地の城下町絵図について注目することとする。こうした絵図の書誌学的な考察を行うことは、城下町松江の絵図など、島根県関係の絵図を多く所蔵する本学附属図書館での研究、ひいては、近年盛んになりつつある山陰地方の絵図の研究の上でも、今後参考となると考えられる。

譜代大名の城下町に関する研究の課題については次のような指摘がある。まず、譜代藩城下町である播磨国姫路を対象に、姫路藩の城下町と商人についてまとめた、日本近世史が専門の三浦俊明によると、「譜代藩城下町に特徴があるとすれば町人地よりも、頻繁な転封にともなって必然化する家中の

屋敷割あるいは諸役屋敷の配置等の中に各大名の独自性を見いだすことができるのではないと思われる。だが残念ながら本書ではその点については未検討であり、今後の課題とせざるを得ない」⁹⁾とし、譜代大名の城下町では、武家屋敷の配置等に各大名の独自性が見出せるとしている。これは、同じく譜代大名の城下町である淀の特徴を検討する上でも重要な指摘である。

また、歴史地理学では近世の城下町が専門の渡辺理絵によると、今後の課題として、「頻繁な移封を経ている藩と一国支配を通した藩に関する武家地管理の差異をより具体的に明らかにすることである。(略) 譜代藩タイプにおいては家財をも含めて藩からの支給物として屋敷が受給されていた場合があるが、移封後の封地では徐々に外様藩と類似の屋敷利用が展開するのか、また封地での武家地管理は一貫性を有していたのかといった点は未検討である」¹⁰⁾としているのも重要であると考えられる。

こうした課題を明らかにするためには、まずは歴史地理学での基礎的な作業として、譜代大名の城下町絵図及びその関連資料を丹念に読み解き、譜代大名の城下町の特性を明らかにする必要がある。さらに、淀藩も同様であるが、譜代大名の城下町では、頻繁に藩主が転封していることから、一時代、一藩主の城下町絵図だけでなく、複数の時代にわたって通時的に城下町絵図を分析する必要がある。そうした作業によって、淀を含めた譜代大名の城下町における武家屋敷の特性について明らかにすることができると考えられる。

そこで、本稿では、絵図の解説、特に武家屋敷や、寺院・寺社など施設の分析、そして絵図と関連史料との照合といった、歴史地理学の基礎的な調査手法を踏まえ、山城国淀を対象に、城下町の拡大が行われる永井時代を中心として、畿内における譜代大名の城下町の特徴を捉えることを目的とする。なお、歴史地理学からみた、城下町淀の空間構造とその変容については、本学学生の乃木健太郎の論文で詳細に触れられている¹¹⁾ので、本稿では省略したい。

本稿の対象とする城下町淀は、元和9(1623)年伏見城の廃棄にともない、松平(久松)定綱が3万5000石で入封した【別表】。定綱は、宇治川対岸の川中島を自然の要害地として選り築城した。淀藩は伏見にかわる京都守衛の任務を第一としたが、寛永10(1633)年に定綱は美濃国大垣へ転封し、かわっ

て永井尚政が下総国古河の8万9100石余から淀へ10万石で入封した。この永井家以降、石川家、戸田家、松平（大給）家と経て、享保8（1723）年に稲葉家が10万2000石で入封し、廃藩まで続いた¹²⁾。淀藩の領主となった大名家は、最初の久松松平家（親藩）のほかは永井家以降いずれも譜代大名であるので、このことから譜代大名の城下町を検討する上で、城下町淀は対象地域として適切であるといえる。

本稿では特に、永井尚政（天正15（1587）年～寛文8（1668）年）の藩主時代に注目する。尚政は徳川家康に仕えて、関ヶ原の戦いや大坂の陣で軍功をたて、3代将軍家光にも信任されてその相談役の地位にあった。寛永10（1633）年、下総国古河から山城国淀に転封すると、京都所司代を補佐して、家光政権による畿内近国支配を後見した。寛永10（1633）年の木津川流路つけ替えによる城下の整備、拡大事業をすすめて淀藩の基礎を固めたほか、宇治の興聖寺の再建や禁裏造営にも尽力した¹³⁾とされ、こうした尚政による政策が、城下町淀の発展と大きく関係していると予想される。

注

- 1) 寅-65は、函号寅、番号65を指す。以下同じ。
- 2) 「淀城大絵図」は、絵図に記載される武家屋敷の人物名から、寛文9（1669）年永井尚征（7万3600石）の丹後国宮津藩に移封後、伊勢国亀山から6万石で淀へ入る、石川憲之時代の絵図である可能性が高いと考えられる。詳細は後述する。
- 3) 境幸政・萩原信一（1966）：『城と陣屋3 山城淀城』、日本城郭協会近畿支部研究会。
- 4) 阿部宏（1968）：淀城と「山城淀御府内図」について、大阪市立博物館研究紀要1、pp.61-63。なお、この論文に取り上げられている国立公文書館所蔵の「淀城図」（江戸末期）は、「日本分国絵図」所収で、美濃国岩村藩旧蔵の絵図であるが、調査の結果、「淀城大絵図」と同系統の絵図であることが判明した。
- 5) ①小林大祐（1988）：近世淀城下町の成立とその変容－近代淀川河川改修工事資料を用いた復元的考察－、日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系28、pp.865-868。②小林大祐（1994）：近世淀城下町、西川幸治編（1994）：『淀の歴史と文化』、淀観光協会、pp.47-55。
- 6) 矢守一彦・今井修平校注（1975）：山城淀下津町記録、原田伴彦編集代表『日本都市生活史料集成4 城下町篇2』、学習研究社、pp.371-416。
- 7) 前掲6）「解題」、p.20。

- 8) ①金沢城研究調査室 (2012)：金沢城全域絵図目録、金沢城研究創刊号、pp.42-45。②金沢城研究調査室 (2014)：金沢城全域絵図の分類と編年、金沢城研究2、pp.18-57。③姫路市立城郭研究室編 (2014)：『姫路城絵図集』、姫路市立城郭研究室 (姫路市立城郭研究室編 (1998)『姫路城絵図展：世界遺産登録5周年記念』を改訂したもの)。④桑名市博物館編 (2016)：『徳川四天王の城－桑名城絵図展－』、桑名市博物館。
- 9) 三浦俊明 (1997)：『譜代藩城下町姫路の研究』、清文堂出版、p.7。
- 10) 渡辺理絵 (2008)：『近世武家地の住民と屋敷管理』、大阪大学出版会、p.185。
- 11) 乃木健太郎 (2018)：城下町淀における空間構造とその変容、島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室編『2017年度 京都府実習報告書』、島根大学法文学部社会文化学科地理学研究室、pp.61-74。
- 12) 佐和隆研ほか編 (1984)：『京都大事典 正編』、淡交社、p.966。
- 13) 前掲12) p.680。

2. 西尾市岩瀬文庫所蔵「淀惣絵図」について

2.1 絵図の印記・識語及び表題

印記、識語をみると、旧蔵者、すなわち、絵図の伝来過程を検討することができる。「淀惣絵図」では、絵図の左下側 (=北西端、「本丸」の文字の向きによる)に、「桃木書院蔵」、「竹中氏図書記」、「平尚功印」の印記、「坂口蔵」の識語がある【写真1】。なお、絵図の表紙には、「岩瀬文庫」、「桃木書院蔵」の印記がある【写真2】。

このうち、「坂口蔵」、「平尚功印」は不明である。管見の限り、「坂口蔵」



写真1 「淀惣絵図」の印記、識語
(西尾市岩瀬文庫所蔵)



写真2 「淀惣絵図」の表紙
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

とある絵図はこのほか3点見つかった。1点目は、国立国会図書館の古典籍資料室所蔵の和装本「宇治河沿岸図」に「坂口蔵」と墨書があり、このほか「淀惣絵図」にもみられる、「竹中氏図書記」の印記がある¹⁴⁾。2点目は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「奥州福島城下大火之図」¹⁵⁾で「坂口蔵」と墨記がある¹⁶⁾。狩野文庫は、明治の思想家・教育者として有名な狩野亭吉(1865～1942)の108,000点に及ぶ旧蔵書で、哲学をはじめ美術、兵学などあらゆる分野に及ぶ「古典の百科、江戸学の宝庫」として世界的にも知られた資料群である¹⁷⁾。3点目は、同じく東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「勢州桑名之図」で、その写真が、桑名市博物館の展示図録『徳川四天王の城－桑名城絵図展－』に収録されている¹⁸⁾。絵図の左下側(＝東側、「本丸」の文字の向きによる)に「坂口蔵」と記されていることが確認できる。このうち写真が確認できる、3点の絵図にある「坂口蔵」の文字を比較すると、同筆である可能性が高いと考えられる。しかしながら、4点の絵図の内容を比較すると、「淀惣絵図」と「勢州桑名之図」は城下町絵図、「宇治河沿岸図」は宇治川の絵図、「奥州福島城下大火之図」は、城下町の大火の絵図であり、4点とも絵図の範疇にあったとしても、城下町絵図は除いて、それぞれ絵図の作成目的が異なることから、後で述べる「竹中氏図書記」と同様に、「坂口蔵」の坂口は、絵図などの収集家であった可能性がある。

「平尚功印」の印記であるが、これも不明である¹⁹⁾。西尾市岩瀬文庫では、他に「平尚功印」の印記のある資料として、「山城国図」(寅64)がある²⁰⁾。「山城国図」にも「桃木書院蔵」と「竹中氏図書記」の印記、そして「坂口蔵」の墨記があるので、「淀惣絵図」と「山城国図」とは同一ルートで岩瀬文庫に入ってきた可能性がある。

次は、「竹中氏図書記」の印記である。これは竹中邦香所蔵本と考えられる。竹中邦香(天保5(1834)年～明治29(1896)年)は、加賀藩士から、明治になり司法官となり、これを辞してのちは、法律、地誌、漁業関係の専門書などを執筆した。そして明治12(1879)年国文社社長に就任した。竹中邦香は『野史』をはじめとする歴史書や法律書など、漢文で書かれた書籍を多く刊行したとされる。西尾市岩瀬文庫には、「淀惣絵図」、「山城国図」のほか、「東見記」(128-89)、「日光山起原沿革略記」(83-20)、「南亭余韻」(8-41)、「六鯨図」(卯-30)の計6点所蔵がある。「淀惣絵図」、「山城国図」のほかは、いずれ

も絵図以外の史料となっている。

最後は、「桃木書院」の印記である。桃木書院とは、神戸市在住の桃木武平(安政5(1858)～昭和4(1929))が、明治35(1902)年神戸で最初に開設した、私設図書館「桃木書院図書館」のことである。西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」によると²¹⁾、桃木武平は神戸の素封家で、兵庫北浜で造船・海運業を営む大松家を嗣ぎ、神戸市会議員を務めた。明治35(1902)年1月、神戸生田町2丁目の自邸内に桃木書院図書館を蔵書数約2万5000冊で開設した。明治43(1910)年4月、東出町3丁目に移転したが、図書館活動は休止した。蔵書の一部と備品は明治44(1911)年11月に開館された神戸市立図書館に引き継がれ、古写本古版本は京都帝国大学に寄託された。昭和4(1929)年3月、京都帝国大学寄託資料540部、4879冊は、神戸の古書店白雲堂の手を経て、旧台北帝国大学に購入され²²⁾、桃木も台北に移住、間もなく死去したとされる。台北帝国大学は戦後国立台湾大学となり、現在「桃木文庫」として同図書館の貴重図書となっている。したがって、「桃木書院蔵」と印記のあるものは、桃木書院図書館の蔵書のうち、神戸市立図書館や国立台湾大学の所蔵とならなかったものである。西尾市岩瀬文庫には、「淀惣絵図」、「山城国図」を含めて、44点存在する。その多くは地理や地誌関係の和書、そして地理関係の一枚物の絵図が多い。

ところで岩瀬文庫は明治41(1908)年に西尾市の実業家、岩瀬弥助が開設した私立図書館として誕生した。西尾市岩瀬文庫学芸員の林知左子氏のご教示によると、岩瀬文庫の『図書原帳』によれば、「淀惣絵図」は大正5(1916)年1月2日に登録されたという。したがって、明治44(1911)年の桃木書院閉館から数年後に岩瀬文庫が購入したこととなる。また、「淀惣絵図」と「山城国図」は、印記から竹中邦香所蔵本→桃木書院図書館→岩瀬文庫というルートで、西尾市岩瀬文庫に入ったと考えられる。

次に、「淀惣絵図」の表題について検討する。西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」の解説によると、書名の備考として、「書名は内題による(右下に縦書)。後補書題簽「城州淀城図」(中央無辺)。旧書名「淀城之図」²³⁾と記している。

昭和11(1936)年発行の『岩瀬文庫図書目録』には、第七門兵事、一、総記及雑書に「淀城之図」(家中屋敷付)²⁴⁾とあるが、この表題(=旧書名)は

「後補書題簽（中央無辺）」にある「城州淀城図」【写真2】を採用したと考えられる。なお、この題簽には、「岩瀬文庫」と「桃木書院蔵」の印記があることから、この題簽は旧蔵者である「桃木書院図書館」もしくはそれ以前に貼ったと考えられる。また、表紙の右上には「城州淀城図 1 3052 図 5 59」、表紙の左上には、「四、一一三 城州淀城図」と記したラベルが貼られている【写真2】。前出の林知左子氏によると、右上の赤い枠のラベルは、全てではないものの、桃木書院旧蔵本に貼られていることから、桃木書院図書館の図書分類ラベルと推測されるという。また、左上のラベルも桃木書院旧蔵の城絵図や合戦図などにみられるが、桃木書院のラベルが2種類もあるのは不合理なので、それ以前の所蔵者、あるいは絵図の製作者か筆写者のラベルではないかと考えられるとのことであった。詳細は不明であるので、今後の課題としたい。いずれにしても、この淀の城下町絵図は、「平尚功」、「坂口」、「竹中氏」、「桃木書院図書館」など多くの所蔵者を経て、現在の西尾市岩瀬文庫に所蔵されていることが確認できた。

現在の書名が「淀惣絵図」とあるのは、内題に「淀惣絵図」とあること以外に、淀の城下町が「池上町・下津町・新町の城内町と納所町・水垂町・大下津町の城外町からなり、淀六郷・淀六町とも呼んだ」²⁵⁾とあるように、この「淀惣絵図」には、城内町と城外町の両方、すなわち、淀六郷全体が描かれていることから、西尾市岩瀬文庫がこの絵図の表題を「淀惣絵図」としたのは妥当といえる。

さらに、西尾市岩瀬文庫所蔵の「淀惣絵図」と同系統の絵図を確認することができた。これは、大山崎町歴史資料館発行の図録²⁶⁾に収録されている²⁷⁾。所蔵は京都府立総合資料館（現在、京都府立京都学・歴史館）である。この図録の解説によると、「10 淀総絵図 『当進軒文庫旧蔵絵図』17世紀頃 城内に住む家老に「永井権右衛門」なる人物が記されており、寛永10年（1633）永井尚政が10万石で入部して以降の絵図と推定される。寛永14年の木津川川違以後の様子を示し、旧河道は埋め立てられ、高嶋の武家屋敷地や新町の町人地が新たに完成している。ただ、高嶋の西先端は宅地化が進んでいない。宇治川北縁の港町納所や淀姫大明神の社家町水垂の景観もよく表す」と記している。

この「当進軒文庫旧蔵絵図」については、京都府立総合資料館ホームペー

ジの古文書解題によると、「16世紀後半から幕末期にかけての模写による絵図、99点。合戦（城攻）図29点、陣列（座備）図22点、古城図14点などのほか、国絵図や屋敷絵図などである。京都に関するものとしては、「淀絵図」「淀城本丸絵図」「桂離宮絵図」「京都府下之図」「瀬田川之図」などがある²⁸⁾とする。管見の限り、「当進軒文庫」の印記のある和書としては、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵、伊勢貞丈著の『雑説問答』²⁹⁾(3-5857-1)³⁰⁾と、京都大学附属図書館谷村文庫所蔵の長尾謙信評注の『新田義貞軍記』(5-08/ニ/1)の2点が確認できる。このうち前者は、「天明八年中原常政多賀氏本ヨリ寫」³¹⁾とあるように、天明8（1788）年の写し、後者は「江戸末期写」³²⁾とされているので、「当進軒文庫」では江戸時代後期の写本を所蔵していたことが分かる。残存している史料数が少ないので、現段階では断定はできないが、京都府立京都学・歴彩館では「当進軒文庫旧蔵絵図」と称していることから、当進軒文庫旧蔵史料のうち、絵図のみが京都府立京都学・歴彩館に入っている可能性がある。また現段階では、西尾市岩瀬文庫と当進軒文庫旧蔵絵図とどちらが原本に近いかは断定できない。いずれにしても、家臣名まで記した、詳細な城下町絵図が筆写され、個人や図書館に引き継がれていたことが確認できる。

注

- 14) 未見。国立国会図書館サーチの書誌データによる。<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007313947-00>（2018年1月8日最終閲覧）
- 15) 絵図の写真、解説は、次の文献で確認することができる。鈴木啓（2006）：奥州福島城下大火之図、予防時報225（日本損害保険協会）、巻頭ページ。写真によると、絵図の左側（＝西側）に「坂口蔵」と墨書がなされている。
- 16) 図書館関係者のブログであると考えられる、個人ブログ「ブログじゃないブログ 公開ノート」の2016-03-06「狩野文庫の蔵書印（その10）」によると、「3-5782-1坂口蔵ノ墨記アリ」とある。<http://no-blog.hatenablog.com/entry/2016/03/06/204700>（2018年1月5日最終閲覧）東北大学附属図書館ホームページの「狩野文庫データベース」によると、3-5782-1は「奥州福島城下大火之図」を指す。http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398kano（2018年1月8日最終閲覧）『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書上』によると、目録には印記は記載されていない。今後の調査の進展を期待したい。東北大学附属図書館編（1976）：『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書上』、東北大学附属図書館、p.773。

- 17) 東北大学附属図書館ホームページの「狩野文庫データベース」による。
http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398kano (2018年1月5日最終閲覧)。
- 18) 前掲8) ④, p.17。なお、解説 (pp.112-113) によれば、寛永13 (1636) 年から正保2 (1645) 年の間の景観を描いたとされる。写真をみると、絵図の左下側(東側) (「本丸」の文字の向きによる) にある注記、「勢州桑名之圖」と「坂口蔵」も同筆である可能性がある。
- 19) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵「勢州桑名之図」には「坂口蔵」の墨書とともに、「尚功之印」の印記があるが、詳細は不明である。現物の調査を含めて、今後の課題としたい。また「尚」は大名永井家の系統の名前でよく使用する漢字であり、先祖は桓武平氏の一流である良兼流をくむ長田氏であるので、永井氏の一族に「尚功」という名前の人物がいないかどうか、『寛政重修諸家譜』を確認したが、大名永井家の系統で該当人物は確認できなかった。この点も今後の課題としたい。
- 20) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「山城国図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) 解説によると、「衆星堂の古書販売目録 (『清興』13号、2013年) に本図と類似する山城国絵図があり (以下、別図と称す)、右下に「山城国高都合并郡色分目録」(石高数一覧) あり、末に「元禄十三庚辰年十二月 石川主殿頭」とある。その石高は本図とほぼ一致するが、葛野郡のみ3万5224石1斗1升8合8勺となっており (元禄郷帳に同じ)、岩瀬本の3万1214石4斗1合8勺と異なる。これは岩瀬本の誤記か。また、綴喜郡の石高は、別図・岩瀬本とも3万107石6斗5升3合6勺であるが、元禄郷帳は3万207石余。これは元禄郷帳の誤記か。一方、村数は岩瀬本と元禄郷帳はほぼ一致するが (相楽郡の村数を岩瀬本は52村とするが、元禄郷帳にある92村の誤記)、別図の村数はそれよりも多い (山城の全村数は岩瀬本では459村、別図では510村)」としている。このうち、古書販売目録にある山城国絵図 (別図) には「元禄十三庚辰年十二月 石川主殿頭」とあり、石高や村数の記載が、国立公文書館所蔵の元禄山城国絵図と一致することから、別図は、元禄13 (1700) 年幕府の命により淀藩主石川憲之が作成した元禄山城国絵図の写しである。したがって、各郡の石高や村数などに異なる点があるものの、岩瀬文庫所蔵の「山城国図」は、元禄山城国絵図の写しの可能性が高いといえる。
- 21) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「安芸備後産物絵図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) 西尾市岩瀬文庫学芸員の林知左子氏にご教示頂いた。
- 22) 鳥居フミ子によれば、国立台湾大学図書館の記録には、「桃木文庫 540部 4879冊 本邦古典ノ蒐集ニシテ古写本古版本多ク、殊ニ日本書紀ノ写本、異版ノ珍本多シ、桃木武平翁ノ旧蔵ニシテ曾テ京都帝国大学ニ依託保管シアリシモ

- ノ」と記されているとある。鳥居フミ子 (1995):『近世芸能の発掘』、勉誠社、p.76。
- 23) 西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「淀惣絵図」の解説による。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧)
- 24) 財団法人岩瀬文庫 (1936):『岩瀬文庫図書目録』、財団法人岩瀬文庫、p.456。
- 25) 前掲12) p.964。
- 26) 大山崎町歴史資料館編 (2000):『第八回企画展 はるかなる淀川－三川合流の歴史－』、大山崎町歴史資料館、p.5。
- 27) 絵図の下側 (西側) (「本丸」の文字の向きによる) には、「老峯」と書かれた紙が貼ってあるが、詳細は不明である。
- 28) 京都府立総合資料館ホームページの「古文書解題」による。<http://www.pref.kyoto.jp/kaidai/kaidai-to.html> (2018年1月5日最終閲覧)
- 29) 国文学研究資料館ホームページの蔵書印データベースによる。http://dbrec.nijl.ac.jp/CSDB_40580 (2018年1月5日最終閲覧)
- 30) 『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書 上巻』、によると、目録には印記は記載されていない。今後の調査の進展を期待したい。前掲16) p.806。
- 31) 前掲16) 及び前掲17)。また「中原常政多賀氏」はいくつかのホームページで確認できるが、このうち、西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」のうち、「事蹟合考」(152-120)の解説によると、書写識語に「時明和六乙丑 (1769) 年冬十二月十三日書写之既成／多賀氏中原常政誌」とあることから、18世紀後期の人物であることが分かる。さらに『武家儀礼格式の研究』によると、「江戸後期の故実家」と記している。①西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100> (2018年1月5日最終閲覧) ②二木謙一 (2003):『武家儀礼格式の研究』、吉川弘文館、p.6,403,428。
- 32) 国文学研究資料館ホームページの日本古典籍総合目録書誌データベースによれば、『新田義貞軍記』は「江戸末期写」と記している。http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_4202602 (2018年1月5日最終閲覧)

2.2 絵図の景観の年代と記載内容

2.2.1 「城砦淀之城図」について

「淀惣絵図」について検討する前に、「城砦淀之城図」(明治大学図書館蘆田文庫所蔵、62-115)【写真3】について、若干検討することとする。「城砦淀之城図」は、寛永14 (1637) 年の木津川筋の川違工事以前の松平定綱時代の景観を描いたとされるが、従来の研究では検討されておらず、また「淀惣絵図」と比較する上で重要な絵図であるからである。

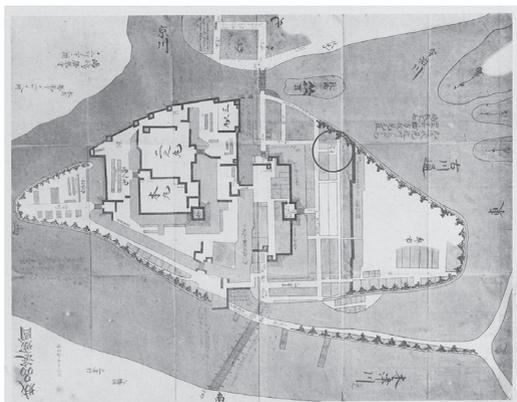


写真3 「城澁之城図」
 (『澁城温故会第九回報告』所収、口絵も参照)

「城澁之城図」の写真は、昭和9（1934）年の^{てんじょう}澁城温故会編『澁城温故会第九回報告』の巻頭に掲載されている。この絵図の解説を澁藩主稲葉家の家老田辺権太郎家子孫である田邊密蔵が書いている。田邊によると、「(井上)先生御帰京後御消息あり、頃日芦田伊人君の話に、同君所蔵に澁の古地図ありとの事なり、就いて借覧を乞ふべしとありしにより、直に同君に懇請せしに快諾ありて送りくれられしが第二の地図なり、まことに初めて見る澁の古図にして、之によりて我澁の古き姿を見ることを得たり。実に(井上)先生のご厚恩、芦田氏の御厚情謝するに言なき次第なり、今此図を見るに、木津川域の南を流れて、南の堀となり、今の富田町、新町、番町、木津、川顔、など凡て木津川流域に所属せり、この木津川を南に押出し、今の木津、川顔と美豆との間を流れしめしは、鈴江武雄氏所蔵の澁城秘鑑といへる写本に、澁城下由緒大概集書写と題するものありて、之れに「一、大橋川違寛永十四年十五両年に有之、一、新町家建初寛永十五年戊寅年より」と見えれば、寛永十四年の事なり（澁城は元和九年松平越中守定綱侯によりて築造せられ、寛永十年永井信濃守尚政侯代りて城主となられし故、此の木津川の附替は寛永十四年に永井侯によりて行はれしなり）、されば此図は寛永十四年以前恐らくは永井侯家臣の手によりて写され、其原図は築城後間もなく作製せられたるものなるべし、今寛永十四年のものとしても築城後僅に十五年なれば、澁町最古の図といふべく、実に貴重すべきものなり（現時の澁城は築

城によりて初めて世に出るものなれば)』³³⁾とある。

すなわち、この絵図は、寛永14(1637)年の木津川違以前の景観を記し、永井家の家臣により筆写されたもので、原図は、元和9(1623)年の松平定綱の築城まもない頃に作製されたとしている。江戸時代の城下町淀を研究する上で最も重要な史料の一つである、『山城淀下津町記録』所収で、元禄・宝永・正徳年間(1688~1716)の大小の事件をまとめた、「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、光明寺は寛永8(1631)年中興開基とされている³⁴⁾。この絵図には光明寺が記されている【写真3】ので、この絵図は築城直後ではなく、寛永8(1631)年以降、寛永14(1637)年以前の景観を描いていると考えられる³⁵⁾。

注

33) 田邊密蔵(1934): 巻頭に掲げし式葉の地図に就て、澁城温故会編『澁城温故会第九回報告』, pp.47-51(国立国会図書館デジタルコレクションによる)。なお、本文にある「芦田伊人君」は、明治大学図書館蘆田文庫の旧蔵者である。蘆田文庫は、芦田伊人氏が長年収集した蔵書のうち古地図類を、昭和32(1957)年明治大学が購入したものである。

34) 前掲6) p.384。

35) 博搜したわけではないが、管見の限り、「城砦淀之城図」と同様に、寛永14(1637)年以前の景観を描いた淀城下町の絵図は以下の通りである(関東地区など主要図書館での調査は未調査である。今後の課題としたい)。岡山藩(池田家)、尾張藩(尾張徳川家)、加賀藩(前田家)、熊本藩(細川家)といった藩が全国各地の城下町絵図を収集していたこと、前田家、細川家の絵図や軍学者山県大武編の『主図合結記』は軍学、兵学の観点から収集されたことが注目される。今後悉皆調査を実施すれば、寛永14(1637)年以前の絵図が他にも確認される可能性が高い。下記の絵図のうち、「城砦淀之城図」と同系統の絵図は「岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫「山城淀城図」(T3-252)である。城郭内の配置、城下町での町割、堀割など基本的な記載がほぼ同じであるが、若干記載内容に違いがある。池田家文庫の方では、城郭地区の西に位置する西ノ丸の北側に、「御殿」や「舞台」など建物が記載されているが、蘆田文庫の方では記載がない。西ノ丸の西側の島崎には、双方とも「侍町」が記載されているが、池田家文庫の方では、島崎の北側の川沿いにも「足軽町」、「侍町」が記載されている。蘆田文庫では大橋の東側の木津川に「川除」が2ヶ所出ているが、池田家文庫の方にはない。城下町の東端の「魚ノ市」付近では、川沿いにある水車から、西方向に水路が伸びて「水道」と記しているが、蘆田文庫の方にはない。池田家文庫の方では、魚の市の北西の川沿いには、「二重櫓 嶋田勝榮軒居之、後嶋田弾正」

と記されているが、蘆田文庫の方にはない。この二重櫓、「嶋田勝榮軒」、「嶋田弾正」については不明である。このうち、嶋田弾正については、『寛政重修諸家譜』巻289に、旗本（5000石）で、慶長18（1613）年江戸の町奉行となる島田利正が、寛永2（1625）年「弾正忠」となったと出ているが、絵図に出てくる人物に該当するかは不明である。『寛政重修諸家譜』巻289嶋田、高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問（1964）：『新訂寛政重修諸家譜 第五』、続群書類従完成会、p.194。したがって、蘆田文庫の絵図と池田家文庫絵図との記載内容の違いを分析すれば、描かれた景観の年代を確定することができると考えられる。詳細は今後の課題としたい。

- (a) 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫「山城淀城之図」（T3-251）、「岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム」による。
- (b) 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫「山城淀城図」（T3-252）同上。
- (c) 名古屋市蓬左文庫所蔵「山城国淀城図」（図235）。
- (d) 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵津田文庫、有沢永貞編写、元禄5（1692）年、『諸国居城之図集』所収「城州淀城図」（特098.6-66）、金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵文書データベースによる。
- (e) 尊経閣文庫所蔵『諸国居城図』所収「山城国淀城図」、宝永8（1711）年頃、前田育徳会尊経閣文庫編（2000）：『尊経閣文庫蔵 諸国居城図』、新人物往来社、p.10。
- (f) 永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」、寛永11（1634）年頃、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編（2013）：『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編2』、吉川弘文館、p.12。
- (g) 山県大弍編『主図合結記』、明和初年頃成立、大類伸（1968）：『日本城郭史料集』、人物往来社、p.496。

2.2.2 新造成地の形成

「淀惣絵図」では第一に、城下町の南側に新たな造成地、新町と高嶋と木津長屋が形成されていることが挙げられる。「城笏淀之城図」【写真3】と比較すると、その違いは明瞭で、新造成地の形成の状況が確認できる【写真4】。「城笏淀之城図」にみられる、木津川及び木津川にかかる大橋（＝淀大橋）は、「淀惣絵図」では、南側に大きく移動したことが分かる。「城笏淀之城図」にみられる大橋の東側に新たに造成されたのが「新町」で、町家、御鷹部屋、淀屋屋敷が形成された。そして大橋の西側には「高嶋」が新たに造成され、「番町」と呼ばれる中級武士の武家屋敷地区ができた。さらに木津川沿いには、足軽屋敷である木津長屋が形成された。



写真4 「淀惣絵図」(全体)
(西尾市岩瀬文庫所蔵、口絵も参照)

「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、「寛永十四丑ノ年、同十五寅年に木津川川違被成候」³⁶⁾とある。城下町の拡大と水害防除のために、寛永14(1637)年、淀で合流する木津川の付替工事が着工され、翌年寛永15(1638)年竣工されたとする。また、同じ「元禄年間淀下津町古記録之写」によると、「新町家立寛永十五年寅より元禄十丑迄五十九年に成る」³⁷⁾とあり、新町で家が建ち始めたのは、付替工事が完了した、寛永15(1638)年であったことが確認できる。したがって、この絵図の景観の年代は、寛永15(1638)年以降と考えられる。

また、『久御山町史 第1巻』によると、藩主尚政が「淀城を水難から守るために木津川の流路替えを行い、併せて城下町を拡幅した」のは、淀だけで

なく、中央においても「寛永十四年江戸城本丸普請・正保四年（一六四七）増上寺御霊屋普請・承応三年（一六五四）禁裏造営奉行など」、「卓越した土木技術を駆使している」³⁸⁾とする。このことは淀での尚政の藩政を考える際にも重要であると考えられる。

注

36) 前掲6) pp.383-384。

37) 前掲6) p.381。

38) 久御山町史編さん委員会編（1986）：『久御山町史 第1巻』、久御山町、p.454。

2.2.3 淀大橋、孫橋の架橋

第二に、「淀惣絵図」では、宇治川及び巨椋池に架かる淀小橋、改修後の木津川に架かる淀大橋、新町と木津長屋を結ぶ孫橋が記されている【写真4】ことが挙げられる。

『山城淀下津町記録』所収で、天保6（1835）年頃成立とされる「淀之由縁」によると、「今の大橋間小橋は寛永十六卯とし出来せし也」³⁹⁾とあり、木津川に架かる「大橋」（＝淀大橋）と、新町と木津長屋を結ぶ「間小橋」（＝まごばし、孫橋）は、寛永16（1639）年にできたと記している。

また、国立公文書館所蔵「譜牒餘録 卷第五十」の（右近太夫嫡男 永井信濃守大江尚政）によれば、「一、同（寛永十五）年淀川瀬違之義言上仕、元川を埋立、侍屋敷ニ自分取立申候、右瀬違ニ付、大橋かけ直り申候故、信濃守より下奉行之もの出し相務申候事」⁴⁰⁾とあり、尚政は寛永15（1638）年の淀川（＝木津川）の瀬違の件を申し上げて、元の川を埋め立て、自分で侍屋敷に取り立てた。また、この瀬違に付いて、大橋（＝淀大橋）を掛け直すので、尚政より下奉行の者を出したとある。したがって、この絵図の景観の年代は、淀大橋と孫橋が架かった、寛永16（1639）年以降と考えられる。

注

39) 前掲6) p.398。

40) 国立公文書館所蔵「譜牒餘録 卷第五十」、国立公文書館内閣文庫編（1974）：『内閣文庫影印叢刊 譜牒餘録 中』、国立公文書館内閣文庫、p.599。

2.2.4 家老の記載

第三に、この絵図には、本丸東側の「東大手」に「永井権右衛門」、「佐川田喜六」が記されている【写真5】ことが挙げられる。いずれも永井時代の家老である。このうち、永井権右衛門は、『寛政重修諸家譜』によると、尚政の子（八男）で、長男尚征なおゆきの弟に、「尚盛 萬五郎 権左衛門 母は某氏家臣となる」^[41]とあるので、正しくは永井権左衛門である可能性が高い。『濃州加納城主永井肥前守家記録』^[42]によると、「延宝三乙卯年八月十日 慧光院様 丹後宮津観音寺 永井権左衛門尚堂公」とある。すなわち、永井権左衛門は、延宝3（1675）年8月10日に亡くなり、寺は丹後国宮津の観音寺とある。永井家が淀から宮津に移封後に亡くなっていることが確認できる。『与謝郡誌 上巻』によると、観音寺は、「圓通山観音寺 城東村字惣の国永にあり。本尊釈迦三尊、もと聖観音を本尊とし、天文年中勅諭佛海慈雲禅師の創立なりといふも詳かならず。寛文年中永井尚征侯、城州淀より宮津へ移封の砌り、賜紫傳心禅師を同行し、翌年改造永井家の菩提所と定め、同師を開祖に仰ぎ、明和七年火災に罹り、安永三年六月再興、寺宝傳行基作聖観音像一軀、法道仙人作薬師像一軀あり」^[43]とある。永井権左衛門の寺が宮津の観音寺であるのは、永井氏が宮津移封とともに、観音寺を永井家の菩提寺と定めたことによることが確認できる。

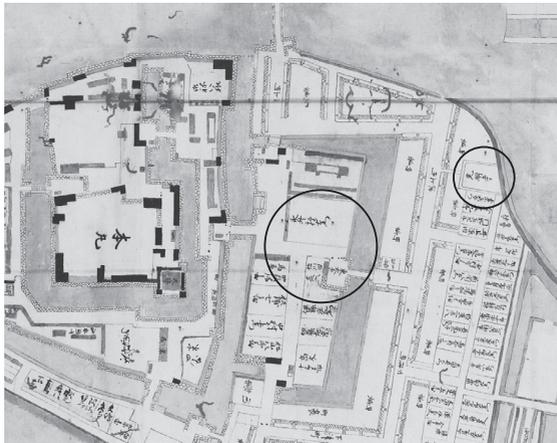


写真5 「淀惣絵図」(東大手付近)
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

『寛政重修諸家譜』によると、寛永10（1633）年3月25日、尚政が下総国古河から移封し、明暦4（1658）年2月28日尚政が隠居すると、長男尚征が家督を継ぎ、寛文9（1669）年2月25日尚征は丹後国宮津へ移封した⁴⁴。したがって、この絵図の景観は、寛永10（1633）年から寛文9（1669）年までの永井時代のものと考えられる。

注

- 41) 『寛政重修諸家譜』巻619永井、高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問（1965）：『新訂寛政重修諸家譜 第十』、続群書類従完成会、p.274。
- 42) 岐阜県図書館所蔵。
- 43) 京都府与謝郡編（1923）：『与謝郡誌 上巻』、京都府与謝郡、pp.204-205。
- 44) 『寛政重修諸家譜』巻619永井、前掲41) pp.270-273。

2.2.5 寺院の記載

第四に、城下町の寺院の記載が挙げられる。「淀惣絵図」には、城下町の南、寛永14（1637）、15（1638）年の木津川の川違によって、新たに生まれた新町の一画に「東雲寺」、「長円寺」、「高福寺」が並んで建っていることが確認できる【写真6】。同じく永井時代の景観を描いたとされる、京都大学

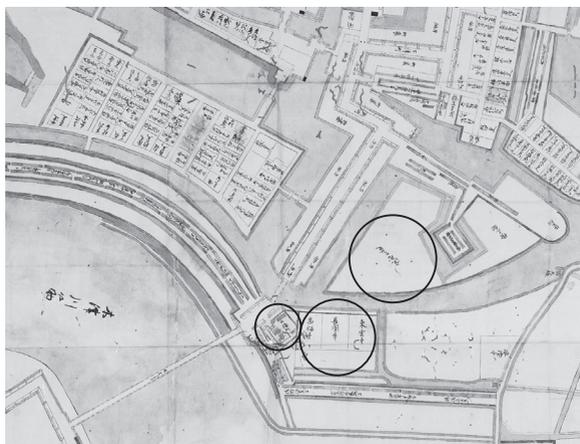


写真6 「淀惣絵図」（新町周辺）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

建築系図書室所蔵の「淀城大絵図」にもこの3ヶ寺が「淀惣絵図」と同じ場所に記載されており、東雲寺は禅宗、長円寺と高福寺は浄土宗と記している【写真7】。『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」には、これらの寺院の由緒が出ている⁴⁵⁾。その史料は、元禄9（1696）年5月に浄土宗本山の知恩院へ提出した、淀四ヶ寺（常念寺⁴⁶⁾、長円寺、高福寺、光明寺）の開山由緒書の控である。このうち高福寺については、「山城国久世郡淀徳光山知相院高福寺は弥陀次郎遺跡也、昔中絶而開山之事は不知、中興開基百一年以前慶長元丙申年心蓮社善誉上人也、其遷化は同十八癸丑三月朔日也」とあり、開山のことは不明であるが、中興開基は、慶長元（1596）年善誉上人によるもので、善誉上人は慶長18（1613）年に亡くなったとしている。長円寺については、「一、山城国久世郡淀寿豊山長円寺は古跡なり、開山之事は不知、中興開基は九十九年以前慶長三戊戌年寂蓮社光誉上人也、其遷化は元和九癸亥年八月廿一日也」とあり、長円寺は古跡で、開山のことは不明であるが、中興開基は、慶長3（1598）年光誉上人によるもので、光誉上人は元和9（1623）年に亡くなったとしている。すなわち、由緒書によると、長円寺と高福寺は、松平定綱が淀城の築城を命じられた、元和9（1623）以前に中興開基がなされ、淀に存在していたことが確認できる。

蛇足であるが、「淀惣絵図」において、池上町の東端に記されている光明

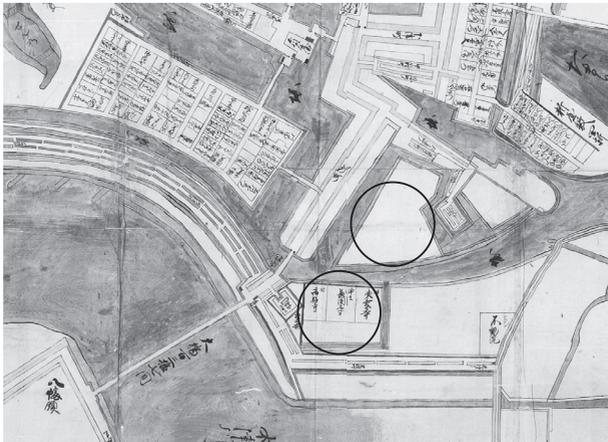


写真7 「淀城大絵図」(新町周辺)
(京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵)

寺【写真5】についてもみてみると、「山城国久世郡淀薬師院は山号なし、雖古跡中絶数年也、六拾六年以前寛永八辛未年相蓮社頓誉上人開基建立、生国は遠江国掛河也、(略)遷化は寛文二壬寅年六月廿日、行年七十四」とあり、古跡であるが、中絶して何年か経過している。(中興)開基は、寛永8(1631)年頓誉上人によるもので、頓誉上人の生まれは遠江国掛川⁴⁷⁾で、寛文2(1662)年に74歳で亡くなったとしている。なお、光明寺は、寛永14(1637)年の木津川筋の川違工事以前の景観を描いた「城笈淀之城図」(明治大学図書館蘆田文庫所蔵、62-115)には、「淀惣絵図」【写真5】と同様に、光明寺が池上町の東端に記されている【写真3】。光明寺の存在は寛永14(1637)年以前の絵図によって確認することができる。

また、『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」には、寺院の移動について次のような記載がある。

「一、昔高福寺は加藤新五右衛門殿屋敷之辺

一、長円寺は山崎孫之丞殿屋敷之辺

一、東雲寺は新儀左衛門殿屋敷之辺

右三ヶ寺は松平越中守様入部被成、其時分代官町の裏通りへ御引被成候、此処今池中に成、右三ヶ寺代官町にて明暦元巳年ノ年二月十八日に焼申候、元禄十丑年迄四十三年、明暦三年に新町寺地被為仰付、東西へ式拾間、南北へ廿七間半つ、被下、高福寺堂東西へ六間、南北五間、(略)右明暦三未年ノ年に立、元禄十年迄四十壹年に成る⁴⁸⁾とある。

すなわち、高福寺の旧地は、現在の加藤新五右衛門の屋敷のあたり、長円寺は現在の山崎孫之丞の屋敷のあたり、東雲寺は現在の新儀左衛門の屋敷のあたりにあったとする。これらの屋敷は、石川時代の家臣を示しているが、詳細については後述する。また、この3ヶ寺は、松平(久松)定綱が淀藩主の時代、元和9(1623)年から寛永10(1633)年の間に、淀城の東側の町人地区にあたる池上町と下津町の東側に位置する、代官町の裏通りへ移動したとしている。後に、明暦元(1656)年⁴⁹⁾2月18日に焼失したので、寛永14(1637)年から寛永15(1638)年までの木津川筋川違工事によって、新たに造成された新町へ、明暦3(1657)年に移動したと記している。先に記したように、「淀惣絵図」では、この3ヶ寺は新町に並んで記されているので、この絵図の景観の年代は、寺院が新町へ移転したとされる、明暦3(1657)年以降となる。

注

- 45) 前掲6) pp.383-384。
- 46) 『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」によれば、常念寺は桂川の対岸の水垂町にあった。水垂町は、新町、下津町、池上町、納所町、大下津町とともに「淀六郷」を構成していた。
- 47) 寛永9（1632）年に光明寺を中興開基した、頓誉上人の生まれは遠江国掛川としていることは注目される。松平定綱は、元和9（1623）年淀へ入封する前には遠江国掛川藩主であった。掛川藩では3万石で、淀では5000石加増され、3万5000石となり、掛川時代より家中の人口が増加したと考えられる。また、一般的に、藩主の転封は、家臣の移動だけでなく、町人や寺院の移動を伴うことが多いため、光明寺の中興開基も、松平定綱の淀への入封と関係している可能性があるが、今後の課題としたい。
- 48) 前掲6) p.381。
- 49) 史料には、「明暦元巳年」、「明暦三未年」とあるが、干支をみると、明暦元（1655）年は乙未、明暦3（1657）年は丁酉であるので、和暦と十二支が合っていないこととなる。十二支を誤記したか、もしくは、十二支の方が正しいとすると「明暦元巳年」は癸巳の承応2（1653）年、「明暦三未年」は乙未の明暦元（1655）年の可能性がある。絵図の年代比定とは矛盾しないが、このズレについては今後の課題としたい。

2.2.6 御旅所の記載

第五に、淀・納所・水垂・大下津の産土神である淀大明神（現在與杼神社⁵⁰⁾の「御旅所」の記載が挙げられる。淀大明神は、城下町北西の対岸に位置する水垂村にあり、「淀惣絵図」には「水垂明神」と記されている【写真8】。また「御旅所」は、新町にある高福寺の西側に描かれている【写真6】。『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」にある、元禄5年（1692）頃公儀へ提出された「大荒木森淀大明神御産所神社御改書上之事」によると、淀大明神の御旅所について、次のように記している。

「御旅所社二ヶ所

一、大下津御旅所境内 東西五間半 南北九間

一、新町御旅（所）境内 東西貳拾三間半 南北貳拾三余⁵¹⁾

つまり、御旅所は2ヶ所あり、1ヶ所は城下町の対岸にあたる大下津町、もう1ヶ所は城下町の新町にあったとしている。「淀惣絵図」では新町の御旅所のほか、対岸の大下津村の川沿いで、水垂明神の西側に、「御旅」の表

記とともに、旅所の建物の絵が書かれている【写真8】。先ほどの寺院の記載と同様に、「元禄年間淀下津町古記録之写」の記載と「淀惣絵図」の記載が一致していることが注目される。また、神輿の渡御の際に仮に安置する御旅所が淀川の両岸にあるということは、淀川の右岸にある神社と、淀川の左岸にある城下町との間を、神輿が船に乗せられ、淀川を渡っていたと考えられ、こうした神輿渡御の祭礼は城下町淀の象徴となっていたと予想される。

さらに、「元禄年間淀下津町古記録之写」には、御旅所の移転について記載がある。「一、新町へ御旅所引け申候は承応三年午ノ年、元禄十丑ノ年迄四拾四年に成る、新町へ不引け前は下津町大専寺南魚市大津土左衛門屋敷辺に有候」⁵²⁾とある。すなわち、淀大明神の「御旅所」は、下津町の大専寺南魚市の大津土左衛門の屋敷付近にあったが、承応3（1654）年に新町へ移動したとしている。したがって、この絵図の景観の年代は承応3（1654）年以降となる。なお、新町へ移動する前の御旅所の位置については後述する。



写真8 「淀惣絵図」（水垂・大下津周辺）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

注

50) 與杼神社の社殿は、桂川河川敷の拡幅工事により、明治34（1901）年7月移転工事の着工、翌年5月完成、同年6月神社のすべてが現在の淀城跡内に移転した。與杼神社公式ページによる。<http://www.yodojinja.com/yodojinja/>（2018

年1月5日最終閲覧)

51) 前掲6) pp.380-381。

52) 前掲6) p.381。

2.2.7 淀屋屋敷の記載

第六に、「淀屋々敷」(=淀屋屋敷)の記載が挙げられる。「淀惣絵図」では、城下町の南、寛永14(1637)、15(1638)年の木津川の川違によって、新たに生まれた新町の東側に記されている【写真6】。なお、淀屋屋敷の東側には「御鷹へや」(=御鷹部屋)が記されている。淀屋屋敷の南側には、新町の一画に移転してきた「東雲寺」、「高福寺」、「長円寺」が記されている。いずれも城下町の縁辺部に位置していることが分かる。絵図のため、正確な面積を計測することは難しいが、本学学生の乃木によると、GISによる計測によって、「淀屋々敷」の面積は、淀城本丸の面積より約1.6倍の面積であるという⁵³⁾。

同じく永井時代の景観を描いたとされる、京都大学建築系図書館所蔵の「淀城大絵図」には、「淀屋々敷」の文字が記載されていないが、「淀惣絵図」で「淀屋々敷」と記載された区画と同様の区画が記載されていること【写真7】から、「淀城大絵図」にも「淀屋々敷」があったとみてほぼ間違いないと考えられる。

さらに、管見の限り、「淀屋々敷」が記載されている淀の城下町絵図が他にも存在することが確認できた。

- (a) 広島市立中央図書館所蔵、浅野文庫『諸国当城之図』所収「山城淀」、天和3(1683)～元禄5(1692)年頃の景観、宝暦13(1763)年～寛政11(1799)年頃成立：「淀やケ庵ヤシキ」⁵⁴⁾
- (b) 名古屋市蓬左文庫所蔵「山城淀城図」(図234)⁵⁵⁾、享保元(1716)年写：「足屋ケ庵屋舗」【写真9】
- (c) 松江歴史館所蔵『極秘諸国城図』所収「山城淀」、元禄5(1692)年：「濱屋ヶ庵屋敷」⁵⁶⁾

先に述べた加賀藩の絵図などと同様に、広島藩の浅野家や松江藩の松平家でも、淀の城下町絵図を収集していること、これらの絵図は軍学、兵学の観点から収集されたと考えられることが注目される。今後悉皆調査を実施すれば、同系統の絵図が他にも確認される可能性が高い。なお、名古屋市蓬左文

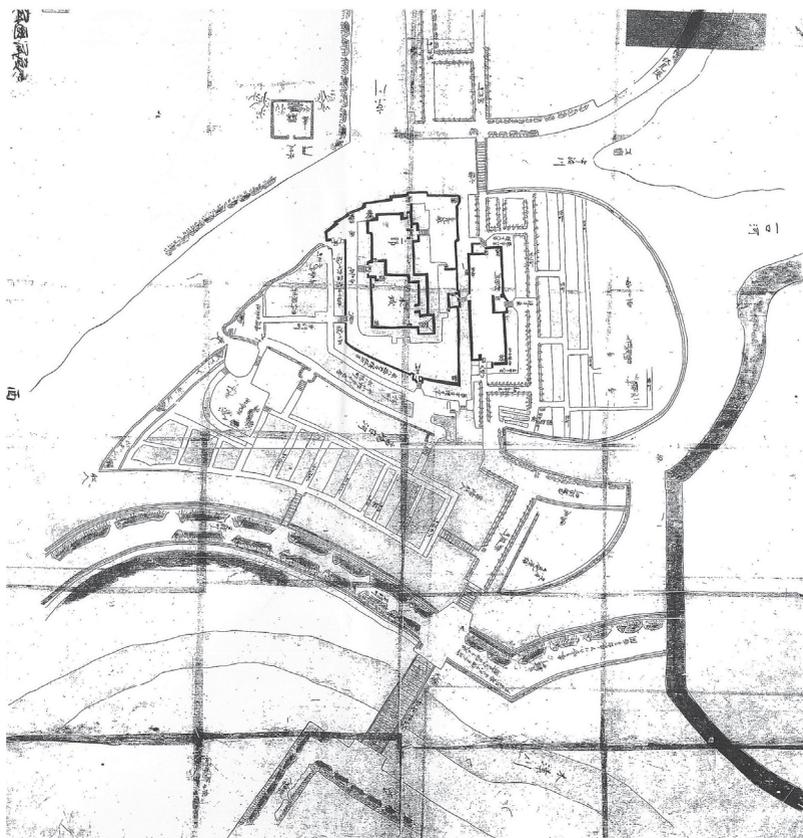


写真9 「山城淀城図」(名古屋市蓬左文庫所蔵)

庫所蔵絵図の「足屋」、松江歴史館所蔵絵図の「濱屋」はいずれも誤記である。

3点の絵図に共通して記されている「ケ庵」あるいは「个庵」は、元禄10(1697)年没の淀屋4代重当、もしくは享保2(1717)年没の淀屋5代広当を指すと考えられる。4代重当は右衛門太郎、後三郎右衛門、个庵とも名乗り、5代広当は三郎右衛門、个庵、辰五郎とも名乗った⁵⁷⁾とされる。

詳細は後述するが、2.25「寺院の記載」で述べた、明暦3(1657)年に移転した新町の「東雲寺」、「高福寺」、「長円寺」が、この3点の絵図ではいずれも新町に記載がない。したがって、3点の絵図は明暦3(1657)年以前の可能性がある。さらに2.26「御旅所の記載」で述べた、承応3(1654)年に

新町へ移転した御旅所も、この3点の絵図ではいずれも新町に記載がない。また、名古屋市蓬左文庫所蔵「山城淀城図」には、下津町に「明神旅所」の記載があり、また御旅所と鳥居の絵が描かれている【写真10】。松江歴史館

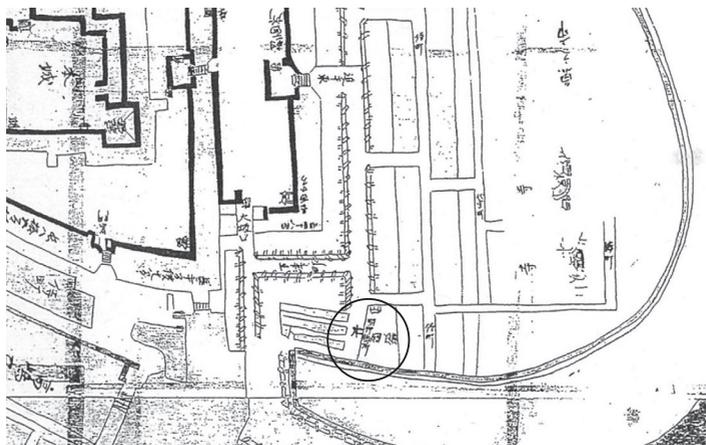


写真10 「山城淀城図」(下津町周辺)
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

所蔵『極秘諸国城図』所収「山城淀」では、「旅所」の文字は記載されていないものの、同じ場所に、御旅所と鳥居の絵が描かれている⁵⁸⁾。こうしたことから、3点の絵図は、承応3(1654)年以前の可能性がある。そうなると、絵図にある淀屋の「ケ庵」あるいは「个庵」は、享保2(1717)年没の淀屋5代広当ではなく、元禄10(1697)年没の淀屋4代重当の可能性が高い。

淀屋屋敷については、『山城淀下津町記録』所収「元禄年間淀下津町古記録之写」にも記載がある。それには、「一、元禄六癸酉年新町淀屋ケ庵屋敷、殿様江被召、池嶋を御築、同十二月に弁才天御社御建立、翌戊ノ正月竹生嶋より弁才天御勧請、毎年正月十三日より同十九日迄御開帳、富在り、尤毎年上(旬)日十日之間操り芝居有之候、同八乙亥年十二月稻荷之御社御建立」⁵⁹⁾とある。元禄6(1693)年、淀藩主石川憲之の時代に、新町にあった「淀屋ケ庵屋敷」は、殿様である石川憲之へ召し上げられ、後に池島が築造され、12月には弁天社が建立された。翌年元禄7(1694)年正月には近江国の竹生島から弁才天が勧請され、毎年正月13日から19日までご開帳されたことなどが書かれている。

先に引用した、境幸政・萩原信一の『城と陣屋3 山城淀城』では、「淀城付近の史跡」の一つとして、「淀屋辰五郎の別荘伝説地」を取り上げている。「江戸時代の豪商淀屋辰五郎の先祖は綴喜郡岡本庄の人だというのが、また淀の出身だという説もある。そういう関係で辰五郎は淀の城下に豪壮な別荘を営んでいたという。辰五郎の念じた弁才天像は今も新町天神社に祝われている。ほか、別荘地跡に建てられたという料亭（今では某会社の寮）もあった」⁶⁰⁾と記し、これまで淀での淀屋屋敷の存在は伝説であったが、絵図と史料を結びつけることによって、その存在を初めて明らかにすることができた。したがって、この絵図では新町に元禄6（1693）年に召し上げられた淀屋屋敷の記載があり、また新町の3ヶ寺が記載あることから、絵図の景観の年代は、明暦3（1657）年以降、元禄6（1693）年以前となる。

注

53) 前掲11) p.67。

54) 原田伴彦・矢守一彦編（1982）：『浅野文庫蔵 諸国当城之図』、新人物往来社、p.10。「諸国当城之図」は、旧広島藩主浅野家に伝えられた城絵図集で、東北から九州までの各地に当時現存した154城を描いた絵図である。このほか、浅野家には古城を描いた絵図177枚からなる、「諸国古城之図」も伝えられている。

55) 絵図の端裏には、「山城国淀城図」とある。

56) 松江市史関係者からの情報提供による。

57) ①物上敬（1943）：『日本商人伝 下巻』、佃書房、pp.87-164（淀屋常安）。②宮本又次（1957）：『大阪町人』（アテネ新書81）、弘文堂、pp.68-84（淀屋常安と个庵）。

58) 前掲56)。

59) 前掲6) p.381。

60) 前掲3) pp.11-12。

2.2.8 家臣の記載

第七に、永井家家臣の記載が挙げられる。永井家の淀藩時代の分限帳は、今のところ確認されていない。永井家は、明暦4（1658）年尚政の長男尚征が7万3600石で家督を継いだ後、寛文9（1669）年丹後国宮津へ転封となり、延宝2（1674）年尚征の三男尚長が家督を継いだ。延宝8（1680）年尚長が江戸の増上寺で、志摩国鳥羽藩主内藤忠勝に殺害されて所領は没収となった。その後、同年尚征の六男直圓なおみつが家名の再興を許され、大和国新庄で1万

石の大名となった。そうしたことから、分限帳だけでなく、淀藩時代の永井家家臣の家系図や由緒書も確認されていない。しかしながら、「淀惣絵図」に記載されている人物のなかで、具体的に家臣の由緒が分かる人物が存在することが分かった。本稿では由緒が判明した2人を取り上げる。

(1) 山本勘介

1人は、高嶋の番町の五番町に記されている「山本勘介」である【写真11】。「山本勘介」とは、戦国時代の武将で、『甲陽軍鑑』で武田信玄の軍師として活躍し、川中島の戦いで討死にしたと伝える伝説的人物であり、武田流兵法の祖とされる山本勘助（菅助）の子孫である。最近、山梨県立博物館関係者の調査により、沼津市在住の山本勘助（菅助）の子孫が山本勘助（菅助）関係の文書を所蔵していることが分かり、存在すら疑われていた山本勘助（菅助）とその子孫の存在や動向が初めて確認された。その成果は2013年出版の『「山本菅助」の実像を探る』で詳細にまとめられている⁶¹⁾。ここではその成果に基づきながら、淀との関係について述べることにしたい⁶²⁾。

山本勘助（菅助）の孫、平一が山本家を継ぎ、旗本として活躍していたが、慶長10(1605)年伏見在番の際に亡くなり、弟の三郎右衛門（文禄3（1594）年生）を含めて、親類は牢人となった。三郎右衛門は旗本になることを望んだが、うまくいかなかった。その後、寛永3（1626）～9（1632）年頃、水



写真11 「淀惣絵図」（高嶋周辺）
（西尾市岩瀬文庫所蔵）

戸藩主徳川頼房の意向により、水戸藩の仕官を勧められた。これは頼房が『甲陽軍鑑』を読み、そこに出てくる山本勘助（菅助）に惹かれ、子孫がいれば召し抱えたいと考えていたからである。しかしながら、寛永9（1632）年までにその話は頓挫してしまった。その後寛永10（1633）年、淀藩主永井尚政の強い希望により、尚政に仕官することになった。同年4月、尚政は転封で淀へ向かう折、甲州に立ち寄り、山本三郎右衛門と対面し、三郎右衛門を召し抱えることにした。同年8月に三郎右衛門は淀に到着し、主君尚政にお目見えし、足軽20人を預けられ、知行300石を拝領した。

三郎右衛門が淀へ向かう際の史料のなかに、城下町淀の状況が出ている。この時永井家家臣佐川田山三郎と三郎右衛門とのやりとりを示した史料によると、「山本を淀に呼ぶのは8月にしたいこと。家臣が滞在する家屋敷が不足しており、普請の途中であることや、寛永十年は淀に洪水被害があり、その影響を受けていたため、淀城下の整備には当初の想定よりも時間がかかるというのが理由であった」としている。この記述は、『山城淀下津町記録』所収の「淀下津町古記録反古」の記述、寛永10（1633）年に尚政が淀へ入国した時に、知行が10万石になったことにより、武家屋敷が不足したので、西岡神谷村⁶³にも御家中衆がいた⁶⁴という記述と関連している。当時、城下町淀では、尚政が下総国古河の8万9100石余から、淀へ10万石で入封したので、家臣を相次いで雇っていること、そして淀では武家屋敷が不足していたこと、尚政は入封の段階から城下町の整備を行っていたことが確認された。なお、三郎右衛門は慶安2（1649）年56才で没し、石清水八幡の神応寺に葬られた。「淀惣絵図」に記載されている人物「山本勘介」は三郎右衛門の嫡子、菅助（晴方）である。寛永9（1632）年生まれで、三郎右衛門の死後、家督を相続した。永井家の家臣として、尚政、尚征、尚長の3代に仕えた。万治3（1660）年には、甲州流軍学の創始者で、『甲陽軍鑑』の編者である小幡景憲とも親交をもち、景憲から甲州流軍学の奥義を伝授された。つまり、江戸時代の山本勘介も兵法で活躍していたことが分かる。

寛文9（1669）年に尚征が丹後国宮津藩に転封すると、山本勘介も宮津へ向かった。延宝8（1680）年8月、尚長の改易により作成された、永井家家臣団の分限帳である、「永井信濃守様分限帳」⁶⁵によれば、「山本菅助」の記載があり、その存在を宮津で確認することができる。山本勘介は、家老、家

老分に次ぐ、「表用人」、すなわち、家老に次ぐ重臣で、家老の命を受けて藩政全般を補佐する職で、300石として記されている。山本勘介は、永井家の宮津時代も家臣として活躍していたことが分かる。

延宝8（1680）年尚長が殺害され、永井家が断絶すると、2年ほどの牢人生活を経て、天和2（1682）年常陸国土浦藩主松平信興のぶおきに仕官し、天和3（1683）年には、土浦城改修の惣奉行となり、大手口（高津口）と搦手口（真鍋口）の大改修を行い、大手は武田流の出柙形、搦手は二重丸馬出に仕上げたとされる。貞享4（1687）年には、山本勘介は松平家の家老職となった。つまり、山本勘介は、松平家で兵学を司り活躍していたことが確認できる。

したがって、絵図の景観の年代は、山本勘介が家督相続を行う慶安2（1649）年以降、山本勘介が淀を離れ、宮津へ向かう寛文9（1669）年以前となる。

なお、山本勘介と淀の城下町絵図との関係でいえば、注35) (f) で述べた、永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」が注目される。熊本大学文学部附属永青文庫研究センターの北野隆の解説によれば、「永青文庫には「小幡勘兵衛本書を以写之」と記された絵図が二三枚存在する。この内、七枚は「小畑勘兵衛殿より来ル写陣取之絵図 寛永拾壹年三月六日」と記された袋に入り、他の十六枚は「絵図 拾六枚」と記された袋に入っている。永青文庫に慶安五年（一六五二）二月九日、尾（小）畑勘兵衛景憲より家老米田左馬允あての書状が存在する。（略）この内「小幡勘兵衛よりの軍書」とは、甲州流兵法を記した『甲陽軍鑑』である。（略）今回掲載の絵図は『甲陽軍鑑』の附図であり、『甲陽軍鑑』と一連のものである。（略）図版9「山城国淀之城之絵図」は、山本勘助との関係で描かれた絵図である。『甲陽軍鑑』では山本勘助について武田家の軍師・参謀的存在とされ、また築城術にすぐれ小諸城などの縄張を行ったという。後には徳川氏に仕え、さらに浪人し甲斐の国にいたが、寛永十年頃に山城国淀藩主永井尚政の淀城に再仕官し「勘助」と名乗ったという。以上九枚の絵図が『甲陽軍鑑』の附図である」⁶⁶⁾とある。つまり、永青文庫所蔵「山城国淀之城之絵図」は、「小幡勘兵衛殿より来ル写陣取之絵図 寛永拾壹年三月六日」と記された袋に入り、表紙には「小幡勘兵衛本書を以写之」と記されていることから、『甲陽軍鑑』を記した小幡勘兵衛景憲から細川家へ、寛永11（1634）年3月に来て筆写された絵図の1枚で、『甲陽軍鑑』の附図であるとしている。小幡景憲がどのようなルートでこの絵図

を入手したのかは不明であるが、『甲陽軍鑑』の刊本には、この絵図は収録されていないこと、そして細川家へ絵図を提供した寛永11（1634）年以前の寛永10年（1633）8月には、山本三郎衛門（勘助）は淀に到着していることから、この絵図は淀藩に仕官した山本三郎衛門（勘助）から小幡景憲に提供された可能性がある。

注

- 61) 山梨県立博物館監修・海老沼真治編（2013）：『「山本菅助」の実像を探る』、戎光祥出版。
- 62) 前掲61) pp.56-72、pp.125-142、pp.160-188。
- 63) 現在、京都府長岡京市神足と考えられる。『京都府の地名』によると、「当時（＝室町時代）神足は「かんだり」の読みがあったことが右文書で判明するが、同時期の某書状案（同文書）（＝九条家文書）には神足氏をさして「かんに」とも称している」とあることから、神谷村＝神足村の可能性が高い。なお、神足の隣の勝龍寺、後に神足には、寛永10（1633）年から慶安2（1649）年まで、尚政の弟直清を藩主とした長岡藩が置かれ、陣屋が設置された。平凡社編（1981）：『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』、平凡社、p.289。
- 64) 前掲6) p.373。
- 65) 宮津市史編さん委員会編（1997）：『宮津市史 史料編第2巻 近世1』、宮津市、p.231。
- 66) 前掲35) 『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編2』、pp.188-190。

（以下次号）

別表 城下町淀の年表（16世紀末期～18世紀初期）

和暦	西暦	月日	事項	出典
文禄4年	1595年	-	淀古城が破却される	-
慶長元年	1596年	-	豊臣秀吉が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
慶長2年	1597年	-	高田寺吉、河村与三右衛門と木村宗右衛門に朱印を与え、淀船支配を命ずる	過書座二十石船由緒書
慶長3年	1598年	-	長円寺が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
元和9年	1623年	閏8月20日	伏見城廃城に伴い、松平定綱に淀城の築城を命じる 遠江国掛川から転封。所領は3万5000石となる	徳川実紀、寛政重修諸家譜、元禄年間淀下津町古記録之写
寛永2年	1625年	正月11日	松平定綱は淀城を築城し、城を賜る	藩翰譜
寛永2年	1625年	-	淀城造営料として銀十貫目を賜る	寛政重修諸家譜
寛永3年	1626年	8月	徳川秀忠、淀城を台覧	寛政重修諸家譜
寛永3年	1626年	8月	徳川家光、淀城に宿営する	寛政重修諸家譜
寛永8年	1631年	-	光明寺が中興開基	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永9年	1632年	-	松平定綱の二男定良が淀で生まれる	寛政重修諸家譜
寛永10年	1633年	3月25日	松平定綱が美濃国大垣へ移封	寛政重修諸家譜
寛永10年	1633年	3月25日	水井尚政が下総国古河から移封（10万石）	寛政重修諸家譜
寛永10年頃	1633年頃	-	家中屋敷不足のため、西岡神谷村にも家中衆あり	淀下津町古記録反古
寛永10年頃	1633年頃	-	高福寺、長円寺、東雲寺が代官町裏通りへ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永11年	1634年	-	文相寺が開基	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永14年	1637年	-	水井尚征・長男尚房が生まれる	寛政重修諸家譜
寛永15年	1638年	-	木津川筋の川邊が完成する	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永15年	1638年	-	新町の家が建ち始める	元禄年間淀下津町古記録之写
寛永15年	1638年	-	木津川筋の屋敷が完成する	淀下津町古記録反古
正保3年	1646年	-	河内国絵図、淀城絵図を幕府へ提出する	寛政重修諸家譜
承応3年	1654年	3月13日	水井尚政が禁裏造営の総奉行となる	寛政重修諸家譜
承応3年	1654年	-	淀大明神の御旅所が下津町から新町へ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
承応3年	1654年	-	水井尚征・三男尚長が生まれる	寛政重修諸家譜
明暦元年	1655年	2月18日	高福寺、長円寺、東雲寺が代官町で焼失	寛政重修諸家譜
明暦3年	1657年	-	水井尚政が隠居し、三男尚征が家督を継ぐ（7万3600石）	元禄年間淀下津町古記録之写
明暦4年	1658年	2月28日	水井尚征・四男の直種（亀之助）が淀で生まれる	元禄年間淀下津町古記録之写
万治元年	1658年	-	水井尚征・長男の尚房が父に先立ち死去（29歳）	濃州加納城主永井肥前守家記録
寛文5年	1665年	7月19日	水井尚征・長男の尚房が父に先立ち死去（29歳）	寛政重修諸家譜

和暦	西暦	月日	事項	出典
寛文8年	1668年	9月11日	永井尚政が淀で死去(82歳)	寛政重修諸家譜
寛文9年	1669年	2月25日	永井尚征が丹後国宮津へ移封	寛政重修諸家譜
寛文9年	1669年	2月25日	石川憲之が伊勢国亀山から移封、1万石加増(6万石)	寛政重修諸家譜・難破録
延宝元年	1673年	12月19日	小橋と孫橋の掛け直しが完成	石川家譜
延宝2年	1674年	4月11日・12日	淀で洪水	石川家譜
延宝5年	1677年	4月5日	五畿内検地につき、幕府から山城一国の検地を仰せつけられる	石川家譜
延宝7年	1679年	6月21日	山城国検地をつとめたことにより、幕府から家臣等に時服白鎖を賜る	石川家譜
天和2年	1682年	4月25日	石川昌能が父憲之に先立ち死去(26歳)	寛政重修諸家譜
天和2年	1682年	8月2日	朝鮮人が淀を通るにつき、馳走の命あり	難破録・石川家譜
元禄6年	1693年	-	新町の淀屋敷に弁財天社が建立される	難破録
元禄6年	1693年	12月	淀屋敷敷地に弁財天社が建立される	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄7年	1694年	1月	竹生島より弁財天が勧請される。毎年正月に開帳あり	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄8年	1695年	12月	稲荷社が建立される	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄10年	1697年	閏2月4日	幕府から山城国絵図の作成を仰せ付けられる	石川家譜
元禄11年	1698年	8月19日	伊勢宮が天下津町端へ移転	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄12年	1699年	10月6日	鷹匠町が雷田町と改称する	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄13年	1700年	3月25日	納所町出火、家118軒焼失	元禄年間淀下津町古記録之写
元禄14年	1701年	6月	伊勢宮が元の川島へ移転	寛政重修諸家譜
元禄14年	1701年	8月18日	淀で洪水、伏見堤と京堤が切れる	寛政重修諸家譜
宝永3年	1706年	正月27日	石川勝之が祖父憲之に先立ち死去(32歳)	難破録
宝永3年	1706年	2月25日	石川憲之が隠居し、義孝が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
宝永4年	1707年	4月25日	石川憲之が病氣養生のため、淀への引越が認められる	寛政重修諸家譜
宝永4年	1707年	7月11日	石川憲之が淀で死去(74歳)	難破録
宝永4年	1707年	10月4日	淀で大地震	寛政重修諸家譜
宝永7年	1710年	9月2日	石川義孝が死去(52歳)	寛政重修諸家譜
宝永7年	1710年	10月23日	石川総麿が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
宝永8年	1711年	2月15日	石川総麿が備中国松山へ移封	寛政重修諸家譜
宝永8年	1711年	2月15日	戸田光熙が美濃国加納から移封(6万石)	寛政重修諸家譜
正徳2年	1712年	-	戸田光熙三男、光慈が淀で生まれる	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	9月4日	戸田光熙が死去(44歳)	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	11月1日	戸田光慈が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
享保2年	1717年	11月1日	戸田光慈が志摩国鳥羽へ転封	寛政重修諸家譜

【訂正】

畿内における譜代大名城下町の基礎的考察（1）
—山城国淀を事例として—

校正終了後、間違いを見つけましたので、以下のように訂正します。

ページ	行	誤	正
22	16	京都大学建築系図書室所蔵	京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵
24	1	淀薬師院	淀薬師院光明寺
27	14	京都大学建築系図書室所蔵	京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵
28	7	この3点の絵図では	(b) と (c) では
28	8	3点の絵図は	(b) と (c) は
29	1	この3点の絵図では	(b) と (c) では
29	6	3点の絵図は	(b) と (c) は
30	5	念じた	念持した